

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月25日現在

機関番号：33403

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730568

研究課題名（和文）

認知症高齢者の対人コミュニケーション行動に関する臨床心理学的研究

研究課題名（英文）

Clinical-Psychological study on interpersonal communication Behavior of Elderly Persons with Dementia

研究代表者

水上喜美子（MIZUKAMI KIMIKO）

仁愛大学・人間学部・講師

研究者番号：00387408

研究成果の概要（和文）：

本研究では、認知症高齢者と介護スタッフとの対人コミュニケーション行動を検討した。この結果、介護スタッフは、コミュニケーション場面で、利用者の言動を理解することや問題行動や攻撃的な言動への対処行動に困難さを感じていた。また、認知症高齢者からの要求行動を理解するうえで、発話や表情よりも「動き・動き方」を手がかりとしていること、食事や関わり場面に比べ、排泄や入浴場面での要求を判別しにくいことが認められた。

研究成果の概要（英文）：

In this study, the interpersonal communication between care staff and the elderly persons with dementia were examined.

As the result, it was found that care staff feels it difficult to understand the behaviors of the persons with dementia during the communication; and to cope with their BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia) and with aggressive behaviors. It was also found that the care staff is guided by the "movement as well as the way of movement" of the dementia persons to understand their request behaviors rather than by their utterance and countenance. And that it is harder to distinguish their requests at the scenes of excretion and bathing than at the scenes of meal and interaction.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：認知症，対人コミュニケーション，介護スタッフ

## 1. 研究開始当初の背景

認知症ケアにおいて、コミュニケーションの良否が、その効果に大きな影響を及ぼすと考えられている。コミュニケーション行動は、言語的コミュニケーションと非言語的コミ

ュニケーションに分類することができ、後者の能力は、かなり重度の認知症高齢者でも保持されていることが知られている（矢富,1996）。

小松・岡山（2007）は、認知症高齢者のコ

コミュニケーションに関する海外文献を検討した結果、これまでの研究は①コミュニケーション促進のための職員教育、②コミュニケーション促進プログラム開発などの7領域に分類することができ、コミュニケーションや相互作用の促進を目指す点が共通していると述べている。そして、認知症高齢者の残存している非言語的能力に着目したケア介入の必要性を指摘している。すなわち、非言語能力の程度を的確に知ることが、コミュニケーションを行うためには必要であり、介入の方法によっては治療効果が期待できることが考えられる。

医療における認知症の治療は薬物療法が主体であり、医療目標は生活機能の一日でも長い維持、周辺症状の緩和、家族の介護負担の軽減といわれている(鳥羽,2007)が、それだけでは不十分である。さらに、付加的な目標として穏やかで自立した生活の維持、在宅への復帰であり、認知、感情、行動の改善なども重要である。このためには、認知症高齢者が、人との関わりの中で一日でも自立した生活を送れるように支援していく必要がある。

## 2. 研究の目的

(1) 認知症高齢者に関わる介護スタッフが、情報を送る(送り手)場合に困難さを感じやすいのか、情報を受け取る(受け手)場合に困難さを感じやすいのかについて検討されていない。そこで、認知症高齢者とのコミュニケーションをとる際にどのような困難さを感じているのかについて検討した。

(2) 認知症高齢者の対人的コミュニケーション行動(要求行動・応答行動)の特性を検討することを目的とし、介護スタッフが認知症高齢者に関わる際にどのような表出行動に着目しているのかについて面接調査と質問紙調査から検討した。

(3) 介護スタッフが、認知症高齢者に関わる際にどのような側面に着目しているのかを検討するために、コミュニケーションの困難さ尺度を作成することを目的とした。

(4) 認知症高齢者における心理的介入について検討するために、日常生活における認知症高齢者と介護スタッフの対人関係に着目し、認知症高齢者と介護スタッフの関わりを検討した。

## 3. 研究方法

(1) 研究Ⅰ：介護福祉士が利用者とのコミュニケーションをとる際に困難だと感じていることを明らかにするために、質問紙調査を実施した。

①対象者：介護福祉会が主催した初任者研修

会に参加した介護福祉士57名であった。

②調査内容：「利用者さんとコミュニケーションをとるときに困難さを感じることを教えてください」という設問に対して、自由記述により回答を求めた。

③手続き：研修の終了後に調査の説明をしてから、同意が得られた方々に調査用紙を配布して、記入後に回収した。

(2) 研究Ⅱ：認知症高齢者の対人的コミュニケーション行動を要求行動と応答行動に分けて、これらの行動の特性を面接調査と質問紙調査を用いて検討した。

①対象者：利用者のうちATDの方は26名(男性4名、女性22名；平均年齢88.68歳；範囲81-97歳)、VaD・CIの方は23名(男性4名、女性19名；平均年齢87.52歳；範囲75-98歳)であった。

②調査内容：面接の内容は、堅田(1986)が作成した要求行動に関する質問紙を参考に作成した。要求行動の場面は、①食べ物の要求、②排泄の要求、③入浴の要求、④他者との関わりなどの要求の4つの場面を設定した。また、面接終了後に質問紙への回答を求めた。質問紙の内容は、堅田(1986)が作成した応答行動に関する質問紙を参考に作成した。応答行動の場面は、表情(ポジティブ)に対する反応があるかどうか、環境からの働きかけに対して、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚などの五感が反応するかどうかについて検討するために、14の質問を設定した。また、認知症の方の感情表出(ポジティブ・ネガティブ)が見られる場面や、関わりが難しい場面などについて3項目を設定し、自由記述で回答を求めた。

③調査方法：F県介護福祉士会に研究協力を依頼し、介護福祉士のケア研究会のメンバーが調査者となり、調査者が勤務する施設の認知症高齢者に関わる社会福祉士や介護福祉士またヘルパーなどを対象として面接と質問紙調査を実施した。面接は、調査的面接法(半構造化面接)を用い、面接内容は、ICレコーダーを用いて記録した。

(3) 研究Ⅲ：コミュニケーションを困難にさせている要因についての検討するために、質問紙調査を実施した。

①対象者：介護現場で働くスタッフ553名であった。

②調査内容：共感的感情反応尺度(櫻井・葉山他,2011)、セルフモニタリング改訂版尺度(岩淵・水上,2003)、コミュニケーション困難さ尺度(水上,2011)、Big-Five(清水,2008)、基本属性(職場、就業形態など)の項目について回答を求めた。

③調査方法：F県介護福祉士会や県内の高齢者施設に協力を依頼し、同意が得られた施設に対し、調査票を配布し、郵送にて回収した。

(4) 研究Ⅳ：介護スタッフは認知症高齢者

にどのように非言語行動を用いているかを検討するため、介護スタッフによる認知症高齢者への接し方を観察した。

①研究対象者：同意の得られた施設 A の認知症高齢者 2 名と介護スタッフ 8 名(男性 1 名, 女性 7 名), 施設 B の認知症高齢者 1 名と介護スタッフ 5 名(男性 2 名, 女性 3 名)であった。

②観察内容：行動目録法を用いて、介護スタッフによる対象高齢者への関わりとそれに対する対象高齢者の反応を発話内容や発話回数などの言語行動および視線や体の向きなどの非言語行動から観察した。

③調査内容：介護スタッフに、自身の年齢、性別、経験年数、取得資格などの基本的属性、性格特性 (Big Five 形容詞短縮版 2006; 清水他, 2008), セルフモニタリング改訂版 (岩淵他, 2003) などから構成された質問紙を実施した。

④調査手続き：施設 A は主任, 施設 B は介護スタッフリーダーを代表者として質問紙と返信用封筒を預け、介護スタッフに配布するよう依頼した。各介護スタッフには回答した質問紙を返信用封筒に入れ、代表者に預けるよう求めた。

#### 4. 研究成果

(1) 研究 I : 45 名の回答者から 79 の回答が得られた。これらの回答は、利用者の言動を理解することに関する「利用者の理解」

(15.19%) と利用者の問題行動や攻撃的な言動への対処行動に関する「対処の仕方」(84.81%) という 2 つに分類することが出来た ( $\chi^2_{(1)}=41.18, p<.01$ )。さらに、対処の仕方では、利用者への対処の仕方に関する回答が 76.12% と最も多く、次いで自分の感情や言動への対処の仕方 (20.89%), 家族への対処の仕方 (1.49%), 他のスタッフへの対処の仕方 (1.49%) という順に困難さがあることが認められた ( $\chi^2_{(3)}=100.10, p<.01$ )。

これらのことから、初任の介護福祉士は、専門職としての経験の浅さから利用者の理解や利用者への対処や対応に関して困難さを感じていることが考えられる。

(2) 研究 II : 対象とした利用者は、重度認知症高齢者 53 名 (男性 7 名, 女性 46 名), 平均年齢は 88.4 歳 (範囲 75-99 歳) であった。自立度は IIIa が 32 名 (60.38%), IIIb が 12 名 (22.64%), IV が 9 名 (16.98%) であった。ここで、自立度別に認知能力や重症度に差異が認められるかを検討した結果、認知能力 ( $M=2.98$ ) や重症度 ( $M=4.73$ ) に差は認められなかった ( $HDS-R : F(2,41)=2.45, n.s.$ ;  $CDR : F(2,50)=1.88, n.s.$ )。

まず、場面別に介護スタッフが利用者の要求をどの程度理解しているのかを検討した結

果、食事の要求は「分かる」との回答をした方が多かったが、排泄や入浴の要求は「分からない」と回答した方が多かった ( $\chi^2(9)=59.54, p<.01$ )。ここで、関わり方の要求は「分かる」から「分からない」の回答数にあまり差がみられなかった。次に、利用者の自立度別に介護スタッフが利用者の要求をどの程度理解しているかを場面ごとに検討した結果、食事 ( $\chi^2(6)=7.88, n.s.$ ) と排泄 ( $\chi^2(6)=7.88, n.s.$ ) と入浴 ( $\chi^2(6)=7.88, n.s.$ ) では差が認められなかったが、関わりでは差異が認められた ( $\chi^2(6)=13.34, p<.05$ )。

さらに、場面別に介護スタッフが利用者の要求を理解する手がかり行動が異なるのかについて検討した。この結果では、どの場面においても差異が認められなかった ( $\chi^2(9)=8.92, n.s.$ ) が、「動き・動き方」に着目しているスタッフは多かった。

以上のことより、認知症高齢者においては介護スタッフによる日常生活での関わりも心理的介入になり得ることが考えられる。今後、応答行動についてもさらに検討していきたい。

(3) 研究 III : 研究 I の調査結果などを参考に、コミュニケーションの困難さに関する 30 項目の尺度を作成した。これらの項目について因子分析 (最尤法, プロマックス回転) をおこなった。因子を構成する項目の設定基準は、固有値 1.0 以上, 因子負荷量 .40 以上とした。構成概念妥当性を検討した結果、3 因子に設定し、30 項目から 12 項目を削除したほうが、内的整合性を保てると判断した。

第 I 因子は、「表出の困難さ」因子と命名した ( $\alpha$  係数 .87)。第 II 因子は、「相互作用の困難さ」因子とした ( $\alpha=.86$ )。第 III 因子は「読み取りの困難さ」因子と命名した ( $\alpha=.83$ )。さらに、G-P 分析と I-T 分析をおこない、最終的に 18 項目のコミュニケーションの困難さ尺度を作成した。ここでの  $\alpha$  係数は .93 で、内的妥当性があると考えられる。

以上のことより、コミュニケーションを行ううえで、相手からの要求・応答などの表出行動を理解して、相手に合わせてコミュニケーションをとることに困難を感じやすいことが推察された。今後、セルフモニタリングや性格など、他の個人特性との関連について検討していく予定である。

(4) 研究 IV : 各介護スタッフの平均非言語行動率 (介護スタッフが対象高齢者に声をかける際に視線または体を向けた確率) は全員が 50.0% 以上であった。この非言語行動は男性よりも女性スタッフに多く認められ ( $t(8)=3.21, p<.05$ )、資格の有無や経験年数に違いはなかった。また、平均非言語行動率別 (高群・低群) に介護スタッフの性格特性などを検討した結果、高群の方が自己呈示変容能力がやや高かった ( $t(8)=1.98, p<.10$ )。以上のこ

とより、介護スタッフが認知症高齢者の呼びかけに対応する時や声をかける時に用いている非言語行動は男性スタッフよりも女性スタッフの方が多く用いているが、それは知識や経験により習得されるものではないことが示唆された。今後、介護スタッフと利用者とのコミュニケーションの相互関係についても検討していきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計7件)

- ① 水上喜美子・岩淵千明 高齢女性における老いの自覚に関する研究(1)－介護度・主観的健康度・日常生活機能からの検討－ 第51回日本社会心理学会, 広島, 2010.9, 696-697.
- ② 水上喜美子 介護スタッフと利用者とのコミュニケーションに関する検討－介護福祉士が感じるコミュニケーションの困難さ－ 第11回日本認知症ケア学会, 兵庫, 2010.10, 313.
- ③ 平木聡深・水上喜美子 認知症高齢者に接する介護スタッフの対応行動に関する検討(1)－BPSD 対処行動と日常対応行動からの検討－ 第11回日本認知症ケア学会, 兵庫, 2010.10, 314.
- ④ 平木聡深・水上喜美子 アルツハイマー型認知症高齢者における周辺症状の検討－認知能力や身体能力との関連－ 第10回中部人間学会, 福井, 2010.12, 59-60.
- ⑤ 水上喜美子・岩淵千明 高齢女性における老いの自覚に関する研究(2)－介護度・主観的健康度・日常生活機能からの検討－ 第52回日本社会心理学会, 名古屋, 2011.9, 188.
- ⑥ 平木聡美・水上喜美子 重度認知症高齢者の要求行動の理解と手がかりに関する検討－介護スタッフへの調査と面接から－ 日本心理学会第75回大会, 東京, 2011.9, 1046.
- ⑦ 平木聡深・荒木結衣・水上喜美子 認知症高齢者に接する介護スタッフの対応行動に関する検討(2)－介護スタッフの非言語行動に着目して－ 第12回日本認知症ケア学会, 静岡, 2012.5, 314.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

水上喜美子 (MIZUKAMI KIMIKO)

仁愛大学・人間学部・講師

研究者番号：00387408